

第四章 孟浩然「春曉」

——結句「花落知多少」の定訓——

一 はじめに

漢詩「春曉」は現在では最も知られた定番教材である。ただし、起句「春眠曉を覚えず」のフレーズが確立したのに対し、結句「花落つること知りぬ多少ぞ（知る多少）」の方はいくつかの言い回しがあり、諸書において見解が異なる。戦後、吉川幸次郎・三好達治共著『新唐詩選』（岩波書店 一九五二）において当該結句の訓読が話題にされて以降、七十年以上もの長きにわたって結句をめぐる論争が交わされてきた。わが国では人口に膾炙した漢詩であるにもかかわらず、未だに定訓が用意されていないことが課題となっている。本章では当該詩「春曉」における結句の諸書の用例について俯瞰しながら、国語教育の観点からの考察を試みる。

二 孟浩然「春曉」について

「春曉」の作者孟浩然是盛唐の詩人であり、李白との交友関係は「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」に詠み込まれて有名

である。自由奔放な生涯を全うして官吏としての出世には無欲であったと言う。春の眠りの中で鳥や雨などの音声に対して耳を研ぎ澄ませているせい、か、当該詩を聴覚的漢詩として論じている先行研究も見られる。^{*}この影響を受けたものとして南宋末期の俞文豹『吹劍録』における「作者盲人説」が存在する。

春曉

孟浩然（『唐詩選』巻六）

○ □ ● ●

春眠不覺曉

しゆんみんあかつきおぼ
春眠曉を覚えす

● ● ○ □ ●

処処聞啼鳥

しよしよいてうき
処処啼鳥を聞く

● ○ ○ ● ○

夜来風雨声

やらいふううこゑ
夜来風雨の声

○ ● ○ □ ●

花落知多少

はなおちし
花落つること知りぬ多少ぞ（知る多少）

【形式】五言絶句／【押韻】曉・鳥・少（上声十七篠）

五言絶句「春曉」は心地よい春の眠りについて詠んだものとして有名であるが、当該詩をめぐるのは「歴史の風雨に散った花」と読む作者の失意の詩、浪人生活を余儀なくされた居直りの詩、世俗の齷齪する連中に対して「高士」の立場から傲然たる嘯きとしての隱逸詩、女性の心情をうたった閨怨詩や艶詩などの諸説があり、多様な解釈がなされ、必ずしも中高生に適した教材であるとは即答できない。中国文学者松尾肇子^{まつおはつこ}は戦前戦後の教科書における「春曉」の採録状況を俯瞰し、戦前ではあまり採録のなかった当該詩が戦後に増えた理由は学習者が親しみやす

い漢詩を収集するねらいがあったと考察する。^{*6} また、漢詩規則についてはⅡ「反法・粘法」・Ⅲ「下三連の禁」が守られていないほか、Ⅴ「押韻」が仄声となり、近体詩としては「拗体」である点が特徴である（第二章 平仄記号）
◆「漢詩規則」参照。

当該詩について起句は「春眠曉を覚えず」といった定訓が確立される一方で、結句については諸書でバラバラである。令和七年（二〇二五）現在、「春曉」は小学校・中学校・高等学校における国語教科書に採録されているが、教科書には次のような訓読の異同が見られる（会社名は略称・数字は採録教科書数）。

▽【小学校五・六学年教科書（国語）】

- ◆「花落つること 知る多少」（光村①）
- ◆「花 落つる こと 知る 多少（花落知多少）」（教出①）
- ◆「花落つること知る多少ぞ（花落知多少）」（東書①）

▽【中学校二・三学年教科書（国語）】

- ◆「花落つること知る多少（花落ッルコト知ル多少）」（光村①・教出①）
- ◆「花落つること知る多少ぞ（花落ッルコト知ル多少ゾ）」（東書①）
- ◆「花落つること知りぬ多少ぞ（花落ッルコト知リヌ多少ゾ）」（三省①）

▽【高等学校一学年教科書（言語文化）】

- ◆「花落ッルコト知ル多少」（明治①・筑摩①）
- ◆「花落ッルコト知ル多少」（三省①・東書②・数研①）
- ◆「花落ッルコト知ランヤニ多少ヲ」（第一④）

三 結句「花落知多少」和書用例——中世から現代まで——

明代中期に編纂された『唐詩選』はわが国において荻生徂徠の唱導により大いに流行した。徂徠の門弟服部南郭はつりなんかくにより享保九年（一七二四）に校訂刊行された『唐詩選』巻六の「春曉」は次のように表記されている。

春眠不_レ覺_レ曉_ヲ

春眠 曉を覺へず

処処聞_ク啼鳥_ヲ

処処啼鳥を聞く

夜来風雨ノ声

夜来風雨の声

花落_ル知_{ンヌ}多少_ソ

花落ること知んぬ多少そ

一般読者に向けて「春曉」はこのような訓読で紹介された。なお、南郭自身にも「春眠」と題して春の眠りを詠んだ翻案詩（五言絶句）がある（『南郭先生文集』第三編卷四）。

これに先行して寛文年間（一六六一～一六七三）に刊行されたものとして京都二条通鶴屋町の書林（文林軒）ぶんりんけん 田原たはら仁左衛門版『唐詩訓解』卷六「花落_ル知_{ンヌ}多少_ソ」や同じく富小路五条上町の書林（文林軒）ぶんりんけん 田原勘兵衛版『校正唐詩訓解』卷六「花落_ル知_{ンヌ}多少_ソ」など諸本によっても訓点の異同が見られた。このほか、真言宗の僧侶泊如はくにょ運しん敵てき『寂照堂谷響続集』卷七（元禄二年（一六八九））にも「花落_ル知_{ンヌ}多少_ソ」とある。それでは南郭の『唐詩選』以降の諸書において結句がどのように読まれたのか以下に確認したい。

①近世（江戸時代）諸書における訓読及び解釈

①入江南溟『唐詩句解』「五言絶句」（享保二十年（一七三五））

花落_ル

想_フ因_ニ風雨_ニ而花_ハ底_ニ落_ツ。

知_{ンヌ}

不_レ知 多少_ソ

不_レ知園間落_ス幾_ニ花_ヲ只恐_ル落_{シテ}無_{ラン}余_ヲ矣。思_ハ不_レ及_ニ他_ノ事_ニ而先_ニ及_フ花_ニ。

是_レ春曉_ノ態。是_レ妙境。

②永井文安『孟浩然詩集』（元文三年（一七三八））

花落知_ル多少

③新井白蛾『唐詩見訓』「五言絶句」（宝暦六年（一七五六））

あらはくが とうしじく

あらはくが とうしじく

知^シヌ^ス多少〔知^シヌ^ストハ、推量ノ意ナリ。実ハ不^レ知ナレドモ、大抵チガイナキ^{コト}也。多少トハ、多カ^クラント云^フ〕

④ 小林^{こばやし}（須原^{すはら}）新^{しん}兵衛^{べゑ}『唐詩選四声並假名附』卷六（宝曆八年（一七五八））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

⑤ 千葉^{ちば}芸^{げい}閣^{かく}『唐詩選掌故』卷六（明和元年（一七六四））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

⑥ 服部^{はつべ}南郭^{なんかく}『唐詩国字弁』卷六（明和四年（一七六七））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

昨夜ハ、風雨ガハケシカツタガ、定テ花モ大^キフ^ニ落^クタデア^{ラフ}、春ノスギユクヲ、惜^ムム情ナリ。ナンノ意モナイヤウナ詩ナレドモ、真景実情非^ハニ妙悟^ニ者^ハ不^レ能^ハ道^フイ。

⑦ 本橋^{もとはし}霞^か岫^{しゅう}『唐詩選事証』卷上（明和四年（一七六七））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

惜^ムム春意^ニ尤^ニ幽雅^ニ。花ノサカリチャガタベノ風雨デハ定テ落花シタデア^{ラウ}。惜^ムイ^ハチヤ。何ホドヲチタヤラシラス。多少ゾサテヲシイ^ハチヤト春ヲオシムノ情ヲ云^フタ。

⑧ 茶釜^{ちやがま}散人^{さんじん}『蕩子筌枉解』（明和七年（一七七〇））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ} おほくでなればよいがとまづほかの事にきがつかず紙^{カミ}のことへおもひつくハ当世^{たうせい}く

⑨ 宇野^{うの}明霞^{めいか}『唐詩集註』卷六（安永三年（一七七四））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

⑩ 大典^{だいてん}顕常^{けんじょう}『唐詩解頤』卷六（安永五年（一七七六））

花^{はな}落^{はな}知^シ多^タ少^{セウ}少^{セウ}

⑪ 戸崎^{とざき}淡園^{たんえん}『箋註唐詩選』卷六（安永九年（一七八〇））

花落ル「知ス 不知 多少ソ。定是不_レ少。知多少三字猶云多。多少最多客、皆同。眠則為「啼鳥起」。覺則思「花落」。幽況可_レ想也。無事愈見。

⑫ 三浦梅園『詩轍』卷六（天明元年（一七八一））

故ニ花落ル「知ヌ多少ソ、トハ、花カドレホド落タカ知ラヌ也。

⑬ 宇野東山『唐詩選解』卷六（天明三年（一七八三））

花落ル「知ヌ多少ソ 昨夜ハ、風雨ガハケシカツタガ、定テ花モ大フン落タデアラフ、春ノスギユクヲ、惜ム情ナリ。○ナンノ意モナイヤウナ詩ナ

レドモ、真景実情非_ハ「妙悟」者「不能」道フ。

⑭ 鴛田忠厚『唐詩選講義』卷六（天明七年（一七八七））

花落ル「知ヌ多少 頭ヲ枕上ニ置テ曙天ノ鳥声ヲ聞キ忽チ前夜風雨ノ声セシヲ思ヒ出シテ言フ也。風雨ノ為_ニ定_テ多少ノ花ヲ吹キ落シタル成ル可

シト也。誠ニ隱士ノ身ニテ屈スル所ナク心ノ欲ル所ニ從テ從容不迫ナルヲ説キ得タリ。但シ古人此詩ヲ評シテ盲子ノ詩ニ似タリト云フ。

⑮ 千葉芸閣『唐詩選講釈』卷六（寛政二年（一七九〇））

花落ル「知ヌ多少 風雨ノ声ガシタ。庭ノ花モ、サソ落シ_テモ多カラント惜ムヤウス、世ニケガレヌ心モ有リテ、真ノ景色ニ、我が閑情ヲノベタ

チャ○多少ハ対文トテ、多ト少ト文字ガ対シテ有ル、ソコデ散文トテ、一字入用ガナイ、此句モ少ノ字ハ、韻ニ用ヒタバカリテ入用デナシ、多ノ字ガ入用チャ、

散文ノ散ハ入用ノナキヲ云デアル、

⑯ 小林高英『唐詩選和訓』「五言絶句」（寛政二年（一七九〇））

花落ル「知ヌ多少 花はなを_ハつるこ_ハしんぬたせうぞ 花は多くちつたであるふと也。只何ともなく浮世をかまわぬ隠者のていなり。

⑰ 皆川淇園『唐詩通解』卷六（寛政五年（一七九三））

花落ル「知ヌ多少 今朝庭花為_メニ之推落_{スル}者、不知_レ有_ニ多少_一也。形ニ客幽人之間情ヲ「尤」尽_ニ「其致」矣。

⑱ 南朝山人『面美知之婬』第一回（寛政年間（一七八九）一八〇一）

はな おちとしんの たせう
花落知多少ハ、

⑲ 田島養元『頭書唐詩選』卷六（享和元年〈一八〇一〉）

はな 落ル 知ヌ 多少ッ

⑳ 龍玉松翁『唐詩朗詠集』（天保十五年〈一八四四〉）

はな おつることしんぬ たせう
花落知多少

㉑ 雲華院大含『歎徳文講義』卷下（弘化三年〈一八四六〉）

うんげんたいがん たんくもんこうぎ
此レハ花落知多少トアルモ多少ハ只多イト云フコト、

㉒ 正定院制心『最要鈔要註』（嘉永四年〈一八五二〉）

唐詩ノ中ニ花落知多少トアルガ、多少ト云ヘバ文字ハ多イト少イトナレドモ花ガ少シ落チタト云テハ義ヲ成ゼズ。

㉓ 中島広足『檀園隨筆』卷上（嘉永七年〈一八五四〉）

なかにまひろたり かしのぞいひつ
花落知多少、是皆辞義至浅、兒女子所_二能_一言_{ニシテ}者_{ニシテ}、而意味雋永、都テ在_二言外_一、非_二諷詠_一無_三以_テ覺_二其妙_一ヲ云云といへる。

上記のうち、①入江南渚・③新井白蛾・⑦本橋霞岫・⑪戸崎淡園・⑫三浦梅園の用例からは「知」は「不知」を含んでおり、「知多少」は「いくら散ったのか知らない」と推量用法と解された状況が踏襲される。結果的に概して「知んぬ」と読み継がれた様子が見られるが、近代以降には徐々に訓読に揺れが生じるようになる。

《戦前における諸書の訓読》

① 松岡文洲『訓点唐詩選』（明治十八年〈一八八五〉）

花落ル^{ハナヲツ}如^{シヤウ}ラン^{シヤウ}多少^{シヤウ}

② 篠田城南『唐詩選講義』（明治二十六年〈一八九三〉）

花落ル^{ハナヲツ}知^シレス^{シヤウ}多少^{シヤウ}

③ 永沢南陵『唐詩選独修』（明治二十六年〈一八九三〉）

花落ル^{ハナヲツ}知^シヌ^{シヤウ}多少^{シヤウ}

④ 松本謙堂『唐詩選講義 鼈頭字義訓解（漢文学講義）』（明治二十六年〈一八九三〉）

花落ル^{ハナヲツ}知^シル^{シヤウ}多少^{シヤウ}

⑤ 緑川幸則『漢文講義』（明治四十年〈一九〇七〉）

花落ル^{ハナヲツ}知^シリヌ^{シヤウ}多少^{シヤウ}

⑥ 久保天随『唐詩選新釈』第四冊（明治四十二年〈一九〇九〉）

花落ツル^{ハナヲツ}知^シヌ^{シヤウ}多少^{シヤウ}

⑦ 斎藤藤次郎『唐詩選註釈（国漢文叢書）』（明治四十三年〈一九一〇〉）

花落知多少 花落つること知る多少。

⑧ 大畑匡山『和漢歴代名詩選』（明治四十四年〈一九一一〉）

花落ル^{ハナヲツ}知^シル^{シヤウ}多少^{シヤウ}

⑨ 久保天随『評註名詩新選』（大正三年〈一九一四〉）

花落知多少 花落つる知らぬ多少ぞ。

⑩ 楠鍛鉄『漢詩篇』（大正四年〈一九一五〉）

花[○]落[●]コト知[○]ンヌ多[○]少[▲]ッ

⑪ 塩谷温 『支那文学概論講話』 (大正八年へ一九一九)

花[●]落[●]ッ知[○]ル多[○]少[●]ッ
上声、篠韻

⑫ 釈清潭 『国訳漢文大成 文学部 第五卷 唐詩選』 (大正九年へ一九二〇)

花^は落^お知^し多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ、

⑬ 大町桂月 『和漢名詩詳解』 (大正十年へ一九二一)

花^は落^お知^ち多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^ちんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑭ 塚本哲三 『漢文叢書 第十四 唐詩選・三体詩』 (大正十三年へ一九二四)

花^は落^お知^し多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑮ 川上天山 『詳解全訳漢文叢書 第七卷 唐詩選』 (昭和二年へ一九二七)

花^は落^お知^し多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑯ 簡野道明 『唐詩選詳説』 卷下 (昭和四年へ一九二九)

花^は落^お知^し多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑰ 平野秀吉 『唐詩選全釈』 (昭和四年へ一九二九)

花^は落^お知^し多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑱ 佐久節 『唐詩選新釈 (昭和漢文叢書)』 (昭和四年へ一九二九)

花^は落^おッ知^しンヌ多^た少^{せう}。
花^は落^おつること知^しんぬ多^た少^{せう}ぞ。

⑲ 塩谷温 『唐詩三百首新釈 (昭和漢文叢書)』 (昭和四年へ一九二九)

花落ツルコト知ル多少● 上声、篠韻 花落つること知る多少ぞ。

⑳ 漆山又四郎『唐詩選註』 附作者略伝』 下卷（昭和六年へ一九三二）

花落知多少 花の落つること知んぬ多少を。

㉑ 直木三十五『明暗三世相』 上卷（昭和七年へ一九三二）

花落つることを知る、多少

㉒ 市川源三『一日一言修養生活』（昭和七年へ一九三二）

花落知多少 花落つる多少を知る

㉓ 塩谷温『興国詩選 漢土篇』（昭和九年へ一九三四）

花落ツルコト知ル多少 花落つること知る多少。

㉔ 川上天山『誰にも解る漢詩作法』（昭和十年へ一九三五）

花落知多少。 花落つる知んぬ多少ぞ。

㉕ 簡野道明『和漢朗吟詩集』（昭和十一年へ一九三六）

花落知多少 花落つること知んぬ多少。

㉖ 松平康国『漢詩大講座 第六卷 名詩評釈（初盛唐）』（昭和十一年へ一九三六）

花落知多少 花落ツル知り 多少ヲ。

㉗ 細貝香塘『漢詩読本』（昭和十一年へ一九三六）

花落ツルコト知ル多少。 花落つること知る多少ぞ

㉘ 川口白浦『唐詩選新釈』（昭和十三年へ一九三八）

花落知多少。 はなお ころよしんめい 花落つること知んぬ多少ぞ。

②⑨ 小林信明 『唐詩選通解』 (昭和十四年へ一九三九)

花落ツルコト知リヌ多少ソ。 はなお 花落つること知りぬ多少ぞ。

③⑩ 小杉放庵 『唐詩及唐詩人』 (昭和十四年へ一九三九)

花落知多少 花落つること知んぬ多少

③⑪ 佐々木久 『作詩と鑑賞 漢詩の新研究』 (昭和十七年へ一九四二)

花落知多少 花落つること知んぬ多少

《戦後における諸書の訓読》

① 塩谷温 『支那文学概論』 上篇 (昭和二十一年へ一九四六)

花落知多少 ル ソ 上声、篠韻

② 吉川幸次郎 『新唐詩選』 (昭和二十七年へ一九五二)

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ

③ 山岸徳平 『唐詩評解』 (昭和二十七年へ一九五二)

花落知多少 やまぎしとくへい (上声篠韻) 花落ツルコト知リヌ多少ソ はなお 花落ちたること知りぬ、多少を。

④ 内田泉之助 『唐詩の解説と鑑賞』 (昭和二十八年へ一九五三)

花落知多少 うちだせんのおすけ はなお 花落つること知る多少。

⑤ 内野熊一郎 『漢文漢字の教育』 (昭和二十九年へ一九五四)

花落知多少 うちのくまいちろう はなお 花落ツルコト知ル多少ヲ

⑥ 太田青丘『唐詩入門』（昭和三十年〈一九五五〉）

花落知多少 花落つること知る多少ぞ。

⑦ 内田泉之助『新選唐詩鑑賞』（昭和三十一年〈一九五六〉）

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ。

⑧ 藤野岩友『漢文学習叢書③漢詩』（昭和三十二年〈一九五七〉）

花落ツルコト知リヌ多少ナルヲ。 花落つること知りぬ多少なるを。

⑨ 諸橋轍次『漢字漢語談義』（昭和三十六年〈一九六一〉）

花落知多少。 花落つること知る多少ぞ。

⑩ 高木正一『漢詩鑑賞入門』（昭和三十七年〈一九六二〉）

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ

⑪ 市川本太郎『漢詩概説』（昭和三十八年〈一九六三〉）

○●○●○● 花落知多少。 花落つること知りぬ多少ぞ。

⑫ 前野直彬『唐詩選（岩波文庫）』巻下（昭和三十八年〈一九六三〉）

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ

⑬ 目加田誠『新釈漢文大系 第十九巻 唐詩選』（昭和三十九年〈一九六四〉）

花落知多少 花落つること知んぬ 多少ぞ。

⑭ 斉藤响『漢詩大系 第七巻 唐詩選下』（昭和四十年〈一九六五〉）

花落知多少 花落つること 知んぬ多少ぞ。

⑮ 高木正一『新訂中国古典選 第十四卷 唐詩選上』(昭和四十年へ一九六五)

花落知多少
はなお 花 落つること 多少なるを知らんや

⑯ 猪口篤志『新漢詩選』(昭和四十一年へ一九六六)

花落知多少
はなお 花 落つること 知んぬ 多少ぞ。

⑰ 田所義行『新評唐詩選』下巻 (昭和四十四年へ一九六九)

花落知多少
はなお 花、落つること、多少を知る

⑱ 太田青丘『芭蕉と杜甫』(昭和四十四年へ一九六九)

花落知多少
はなお 花 落つること、知る 多少ぞ。

⑲ 高木健夫『唐詩選の旅』(昭和四十五年へ一九七〇)

花落知多少
はなお 花 落つること 知んぬ 多少

⑳ 有原末吉『漢詩鑑賞二百選』(昭和四十九年へ一九七四)

花落知多少
はなお 花 落つること 知る 多少

㉑ 入谷仙介『漢詩の散歩道』(昭和四十九年へ一九七四)

花落知多少
はなお 花の落つるを知る 多少ぞ

㉒ 山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』(昭和五十三年へ一九七八)

花落知多少
はなお 花 落つること 知んぬ 多少ぞ

㉓ 前野直彬『中国文学序説』(昭和五十七年へ一九八二)

花落知多少
はなお 花 落つること 知んぬ 多少ぞ

②4 長谷川滋成『漢詩解釈試論―転句を視点にして―』（昭和五十七年〈一九八二〉）

花落知多少 花落つること多少を知らんや

②5 猪口篤志『評釈中国歴代名詩選』（昭和五十七年〈一九八二〉）

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ。

②6 松枝茂夫『中国名詩選（岩波文庫）中巻（昭和五十九年〈一九八四〉）

花落知多少 花落つること知らず多少ぞ。

②7 松浦友久『唐詩 心のリズム』（昭和五十九年〈一九八四〉）

花落知多少 花落つること知る多少

②8 藤堂明保『中国の歴史と故事（旺文社文庫）』（昭和六十年〈一九八五〉）

花落知多少 花落つること多少かを知るや。

②9 蔡子民『唐詩旅情』（昭和六十年〈一九八五〉）

花落知多少 花落ちるの多少かを知るや。

③0 前野直彬『不随園詩話（六）』（『中国古典研究』第三十五号 平成二年〈一九九〇〉）

花落知多少 花落つること知るや多少ぞ

③1 石川忠久『漢詩をよむ 春の詩100選』（平成八年〈一九九六〉）

花落知多少 花落つること知んぬ多少ぞ

③2 一海知義『漢詩入門』（平成十年〈一九九八〉）

花落つること知る 多少ぞ

③③ 中野孝次『わたしの唐詩選』（平成十二年△二〇〇〇△）

花落知多少 花落つること多少なるを知らんや

③④ 宇野直人『漢詩の歴史』（平成十七年△二〇〇五△）

花落知多少 花落つること 知る多少

③⑤ 猪口篤志『中国歴代漢詩選』（平成二十一年△二〇〇九△）

花落知多少 花落つること 知んぬ多少ぞ。

③⑥ 石川忠久『漢詩鑑賞事典』（平成二十一年△二〇〇九△）

花落ツルコト知ンヌ多少 花落つること 知んぬ多少ぞ

③⑦ 田部井文雄『漢詩塾 漢字文化の魅力下 本文編』（平成二十三年△二〇二一△）

花落ツルコト知ル多少 花落つること 知る多少

③⑧ 田中佩刀『中国古典散策 現代語訳と訓読と』（平成二十五年△二〇二三△）

花落つること 知んぬ多少ぞ

③⑨ 宇野直人『漢詩名作集成《中華篇》』（平成二十八年△二〇一六△）

花落知多少 花落つること 知んぬ 多少ぞ

④⑩ 好川聡『新釈漢文大系詩人篇3 王維・孟浩然』（令和二年△二〇二〇△）

花落知多少 花落つること 知る多少ぞ

概して「花落つること知んぬ多少ぞ」と訓読しながらも語釈では「知らない」を意味する伝統を踏まえているが、このほか「知る」・「知りぬ」・「知らんや」などの読みも散見され、「春暁」の結句はいくつかの読み方がなされて

きたことがうかがえる。注目したい点は同じ著者であっても読み方が異なっているところである。近年の④好川に至っても「後に疑問詞がつくと推量の意味となる。伝統的な訓「知んぬ」と読んでも意味は同じで、後に疑問詞がついた時の漢文訓読の読み癖。「知った」という意味ではない」と述べており、訓読は時代ごとに読み換えられながらも解釈は江戸から現代まで基本的にほぼ一貫して踏襲されてきた状況がうかがえる。

四 結句「花落知多少」をめぐる——雑誌『解釈』を中心に——

前節でも確認したように近代以前に起句「春眠曉を覚えず」の定訓が確立していたのに対し、末尾の結句「花落知多少」が諸書によってまちまちであることが課題として浮かびあがった。当初は服部南郭『唐詩選』の施訓以降、「花落つること知んぬ多少ぞ」と読まれてきたが、徐々に読みが紛れていく。この結句の解釈をめぐり、中国文学者吉川幸次郎の発言がきっかけとなり、創立もない解釈学会においても雑誌『解釈』創刊号以降、星川清孝・福田襄之介・田所義行・竹谷長二郎・田中佩刀などにより盛んに取り沙汰されてきた。その後も漢詩訓読の一例としてたびたび論じられた（なお、著者の肩書きは掲載当時のものである）。

昭和二十七年（一九五二）八月、京都大学教授吉川幸次郎は岩波新書『新唐詩選』を発売してベストセラーとなったが、当該箇所には「花落つること知んぬ多少ぞ」という伝統的な訓読を踏襲しながらも、「最後の句の「知多少」は、多少なるを知らんや、従って実は「不知多少」、多少なるを知らず、の意である。ある解釈には多少とは多きことといい、たくさん散りしいたであろうと説いているが、そうではない」と疑義を提示する。[＊]

昭和三十年（一九五五）五月、茨城大学教授星川清孝は吉川幸次郎の伝統的な訓読と解釈の乖離を指摘しながら、「知多少」を「多いことがわかる」と解し、「知んぬ多少ぞ」や「知る多少」などの読みに拘泥するのではなく、「多少

なるをけれども」や「知ること多少ならんや」と読んだ方が穏当であると説いた。^{*8} また、岡山大学教授福田^{やだ}襄^{じやう}之介は「多少」は「多い」の意ではなく、「いくらか・いかほど」と解したうえで、「いかほど散ったであろうか」と自問しながら「随分沢山散ったであろうな」と自答した中に心理の過程が含まれているものとして「多少」の二字の中に言い知れぬ深みがあると見ている。^{*9} 東京女子大学教授田所^{たどころ}義行は日本語の変遷により今までの訓読が耳障りになった場合には新たな読みを考えるべきであるとし、当該詩句についても「花落^{ツル}コト知^ルヌ多少^フ」は「花落^{ツル}コト知^ルヌ多少^フ」と読む方がすっきりすると述べている。^{*10}

昭和三十五年（一九六〇）四月、都立日比谷高校教諭竹谷^{たけにちやう}長二郎はこの問題を明確に整理しており、(一)「多少」を「多」の義と解し、「多いことを知る（たくさん落ちたであろう）」（甲説）、(二)「多少」をどれほどの義と解し、「知」は以下の不定を受けて「知らず」の意と捉えて、「どれほど落ちたかわからない」（乙説）、(三)両説を折衷した「どれほど落ちたであろうか。定めたたくさん落ちたであろう」（丙説）の三説をあげ、当該詩の中に含蓄深さを見ている。^{*11} また、「知^ルヌ」の「ぬ」は「打消」ではなく、「完了」であることに言及しながら誤解を避けるべく「知^リヌ（知^ル）多少^フ」と読むべきであるが、「知らず」の意味を出したのであれば、「多少^フ知^リヌヤ」の読みがふさわしい点にも触れ、「漢詩の訓読にテンスの緊密性を論じるのに足らんや」と結論づけた。同年六月、明治大学助教田中^{たなか}佩^は刀^{かし}は「多少」を「多い」の意味に解し、「ゆうべは強い雨風だった。花も沢山散っただろう」と訳されるべきと説く。^{*12} さらに昔からの訓読を斥^{しりぞ}けて新しい訓読を主張することは徒勞であると言及し、「花落^{ツル}コト知^ルヌ多少^フ」と訓読し、「知^ルぬ」は「知^リぬ」の義であることを強調し、竹谷の説く「知らず」の意ではないと反論する。

昭和三十七年（一九六二）六月、東京都立大学教授松枝^{まつえだ}茂^{しげ}夫は古来より「知^ルヌ多少^フ」と何のことかわからぬへんな読み方をして、「多いことがわかる」というふうに解釈してきたこと、「多少」の「少」という字は帶字といって、

意味のない添え字というのも間違いであり、「いくら」という意味の数量の疑問詞であることに触れている。^{*13} さらに、「知多少」は「不」の省略により「知らず多少ぞ」と訓読した方が正しく意味も通るものとし、王朝時代の古語をいたずらに墨守するのではなく、わかりやすい口語を使うべきであることについての言及もある。

昭和五十六年（一九八一）三月、鹿児島大学教授松尾善弘^{まつおよしひろ}は近年の諸書における「春曉」の訓読を並べたうえで、その可否を云々するのはあまり成算的ではないとし、「知多少」の訓点を施す直訳法で理解することは無理であると指摘する。^{*14} 「花落つること多少を知らず」が原詩に近い読み方と述べ、それが無理でもせめて「花落つること多少を知らんや」が原意に沿ったものであるとの見解が示される。

昭和六十二年（一九八七）四月、元福岡県教育研究所長牧克己^{まきかつみ}は「知多少」について「知」の下に疑問詞がつく場合には反語の意を帯びているため、「不知多少」の意味であると説き、従来の「知^ンヌ多少」や「知^ル多少」も原文の真意を伝えていない点からこれを斥けて「知^{ラン}ヤ」もしくは「知^{ラヌ}」と読むべきであると述べている。^{*15} 翌六十三年（一九八八）四月、元大東文化大学教授原田種成^{はらだたねしげ}は牧の提唱する反語「知らんや」の解釈に異論を述べ、「知んぬ…ぞ」の形で「…わからない（知らない）」の意ではなくして、「いったい…であろうか」となり、疑問の強調の意となると論じる。^{*16}

平成十一年（一九九九）三月、帝京高校教諭中村佳文^{なかむらよしふみ}は国際化時代における漢詩教育を考察している。ここでは漢詩教材の持つ根元的な「韻律性」と「抒情性」を複数の読み方をする事で、リズムを生かしながら「読解鑑賞」に至る方向性が説かれ、具体的には次のような《字音読み（原詩）》・《訓読（文語自由詩）》・《翻訳詩（文語定型詩）》井^い伏鱒二^{ふせまたに}『厄除け詩集』》など重層的に読むべきことが示されている。

《字音読み（原詩）》

花^か落^{らく}知^ち多^た少^{しょう}×

《訓読（文語自由詩）》

花落^{はなふち}つること 知る^{しる}多少

《翻譯詩（文語定型詩）》

散^{さん}ツタ木ノ花^{はな}イカホドバカリ

*17

さらに国際化における古典教育として「日本文化Ⅱ外来語の摂取・受容」の立場を明確にして「東アジアの文化圏」の一つとして明確にしていくなきであると言及する。

ここで改めて「知んぬ」の箇所注目したい。前出の竹谷によれば、「知んぬ」は「知りぬ（知った）」と「知らぬ」との混用があることを注意しているが、実はこの読みこそどちらの意味を内包する点でふさわしいものではないだろうか。南郭が『唐詩選』の中で明確に「知んぬ」と施訓したのもとして「春曉」結句以外には次のような用例がある。

- ・ 歳^{さい}歳^{さい}花^{はな}開^{ひらく}知^し誰^{たれ}カ
（卷五 李^り頎^き「贈盧五旧居」）
- ・ 知^し君^{くん}到^{たう}ル 処^{ところ}有^あ逢^{ほう}迎^{よう}一^{いち}
（卷五 高^{こう}適^{せき}「夜別韋司士」）
- ・ 明年^{めいねん}此^{こゝ}会^あ知^し誰^{たれ}健^{けん}ナラン
（卷五 杜^と甫^ほ「九日藍田崔氏莊」）
- ・ 馬^{うま}首^{しゅ}東^{とう}来^{らい}知^し誰^{たれ}ソ
（卷七 王^{おう}昌^{しょう}齡^{れい}「出塞行」）

「知んぬ」は疑問詞や推量を伴っているものが多く、その結びつきにより「どれほど」の意味を生じることがわかる。ただし、どれほど落ちたかを知っているか、知らないかの差異はさほど大きいものではない。ちなみに「春曉」を戯作の中でもじった用例として、大田南畝『行^{ゆき}残^{のこ}知^し多^た少^{しょう}』（狂詩集『通詩選笑知^{つうしせんしょうち}』「春前^{しゅんぜん}」結句 天明七年（一七八七））、式亭三馬『鼻落^{はなおち}知^し多^た少^{しょう}ぞだ』（滑稽本『四十八癖^{しじゅうはちくせ}』第三編 文化十三年（一八一六））などからも「知んぬ」の読みの定着が見られる。やはり、「ぬ」の用法に着目する必要があるだろう。助動詞「ぬ」には「完了の終止形」と「打消の連体形」があるが、この「ぬ」が「打消の終止形」となる江戸時代の用例には以下のものがある。

◆【ない袖は振れぬ】

・ある袖ハふれどなひ袖ハふられぬと云こと

・なき袖はふられぬ

・兎角ない袖ハ振れぬといへ共、呉服屋心つよく堪忍せず。

◆【泣く子と地頭には勝てぬ】

・泣児と地頭とには不^ぬレ^{かたれ}克

・ヘンなく子と地頭にハかたれぬとハ、よくいつたもんだ。

それでは、なぜ「知多少」が伝統的に「不知多少」と解せられてきたのだろうか。その理由について唐詩テキストの問題が考えられる。漢文学者鈴木修次は、中唐期に入るまで唐詩はその制作時において編纂する意図が希薄であり、多くの漢詩作品が散逸されていた状況を踏まえたうえで、活版印刷が開発された北宋期になつてから唐詩は宋本によつてまとめられた点を指摘する。^{*18} 北宋期に成立した詩文集『文苑英華』巻百五十七において当該詩句の異説も所収される。その一説として提示された転句・結句を載せる。

〔転〕欲知昨夜風 昨夜の風を知らんと欲し

〔結〕花落無多少 花落つること多少無からんや

人口に膾炙した当該詩と比較すると、異説の場合には結句の「知」が転句に移り、結句の「無」によつて通説の「知らず」の意が生じたようにも考えられる。この点を踏まえると、「知」が「不知」の意を内包したことの説明がつく。このように「春曉」の結句をめぐる様々に論じられてきたが、漢詩の読み方についてはすでに戦前において詩人の佐藤一英が次のように語っている。

漢詩の読みといふものは、日本風の読み方といふ一つの方向は定められてゐたが、その方法の上では決定的な

〔安原貞室「かたこと」巻五〕

〔皆虚「世話尽」巻二「曳言」〕

〔井原西鶴「男色大鑑」巻七〕

〔松葉軒東井「譬喻尽」巻三〕

〔式亭三馬「人間万事虚誕記」後編〕

ものが何もなかったのであるから、鑑賞家や、学者は各自が各自の方法で読むより道はなかったのである。読みが十人十色になるのはむしろ当然ではないか。この日本風の読み方といふものは、厳密な意味では読みとは呼べないもので、半ば訳を兼ねたものであつた。即ち厳密には訳とも読みとも呼べないもの、そのいづれともつかずいづれでもあるといふやうな読みが漢詩の読みとして今日まで通用して来た。元來訳といふものは千差万様のもので一定できないものであつてみれば、この従来漢詩の読みが、なかば訳を兼ねたものである以上、一定しないのはあまりに明白なことである。^{*19}

また、早稲田大学教授松浦友久は平安時代以降漢詩の享受方法が「訓読」によつて行われてきた事実に着目し、「訓読漢詩」を事実上日本語の「文語自由詩」に位置づけて「和歌」や「俳句」のような「文語定型詩」と互いに補い合つて、日本語の詩歌の歴史において不可欠の役割を果たしてきたとし、さらに「春曉」の結句についても言及する。

「春眠曉を覚えず」(孟浩然「春曉」)の最終句「花落知多少」は、江戸時代以来、

花落つること 知んぬ多少ぞ

と読まれてきた。ただ、これでは現代の読者には意味が分かりにくいという配慮から、戦後の教科書類では、
花落つること 知る多少

と読み替えられている。しかし、伝統的な読みを尊重する漢学系の読書会や詩吟会、あるいは、そうした立場から書かれた訳注類では、「知んぬ多少ぞ」が正調の訓読として脈々と承けつがれている。^{*20}

ここでは「多少」が疑問詞「どのくらい」の意とし、「知多少」は語法的に「不知多少—多少を知らず」(どのくらい分からない)を意味したものと解しており、「知んぬ多少ぞ」も「知る多少」も、ともに正確な訓読とはいえないが、「知るや多少ぞ」あたりが原意に近いが、「知る多少」と「知んぬ多少ぞ」がそれぞれ譲ることなく強

固に受けつがれてきたのは、「訓読漢詩」は響きやリズムそのものが一義的な重要性を持つており、最初に覚えた読みを換えるのに違和感が大きいという原理が強く作用した点に言及する。

明星大学教授古田島洋介は、漢文訓読は翻訳でありながら原文を記憶しやすいように発達してきたと主張する東洋哲学者鈴木直治（すずき なおじ）『中国語と漢文』の論説を踏まえ、「漢文訓読Ⅱ《記憶術》」論の観点からの検証を試みている。^{*21} 漢文訓読には定訓の偏重・語序の制約の特徴があることを挙げながら、漢詩の訓読については原詩の律動を重んじて返り読みを避けること、さらに音読が熟語化していない以上、訓読することが必要であるものとし、訓読文「花落つこと／知んぬ多少ぞ」と韓国式読解文との比較もなされている。上記のように「訓読漢詩」について安易に読み換えを許容してしまうことは却って学習者に混乱を与えてしまうことにもなりかねず、『記憶術』の観点からも望ましいことではないことがわかる。

つまり、南郭は「知多少」をめぐる当該詩における「知」についてはその詩意から肯定も否定も加味しつつ「知んぬ」という絶妙な訓読を施したと結論づけられる。訓読の硬質性に照らせば、端的に意味が理解できないにしても定訓としての成立を目指すべきではないだろうか。

五 まとめとして

本章では孟浩然の漢詩「春暁」の結句の解釈及び訓読の用例を俯瞰した。起句「春眠暁を覚えず」が日常生活において深く浸透しているのに対し、結句については近代期に入るとすでに読みの異同が生じ、令和七年（二〇二五）現在でも現行の国語教科書には「花落つこと知る多少」を中心にいくつかの訓読が見られる。ここには伝統的訓読と口語的解釈との乖離の問題が横たわっている。当該詩には訳詩もいくつか作られており、大正十四年（一九二五）

の土岐善麿 [Hana uriken ka Niwa mo sen. (*花散りけんか 庭も狭に)] (『鶯の卵』)、昭和十年(一九三五)の佐藤一英「花や落ちし 落ちずやいかに」(『新韻律詩抄』)、昭和十二年(一九三七)の井伏鱒二「散ツタ木ノ花イカホド バカリ」(『厄除け詩集』)などが作品として有名である。

戦後、吉川幸次郎が『新唐詩選』において結句の訓読に疑義を呈して以降、七十年以上もの間決着がつかず、定訓が不透明になったことは大変惜しむべきことである。松浦友久は「訓読漢詩」を事実上日本語の「文語自由詩」に位置づけ、古田島洋介は「漢文訓読Ⅱ〈記憶術〉」の観点から訓読の重要性を論じたが、国語教育における定訓の消失ははなはだ憂慮すべき事案となる。近世以降の訓読・解釈に照らせば、「不」を用いずに「不知」の意味を添えたものと解されてきたが、この点においては「知んぬ」の読みが迂遠なようで実は最適解だったのではなからうか。改めて服部南郭が考案した「花落つること知んぬ多少ぞ」の定訓に立ち返るべき時期であると結論づけたい。

注

- 1 加藤敏「孟浩然「春曉」——漢文教材としての可能性——」(千葉大学教育学部『千葉大学教育学部研究紀要』第五十四号二〇〇六年二月)・阿部正和「漢詩における聴覚的表現——孟浩然「春曉」を手がかりにして——」(広島大学国語教育会『国語教育研究』第四十九号 二〇〇八年三月)

- 2 高木健夫「西安の章」一〇～一一頁。(『唐詩選の旅』講談社 一九七〇年五月)

- 3 入谷仙介「春曉」三七頁。(『漢詩の散歩道』日中出版 一九七四年十月)

- 4 石川忠久「春曉」一一五頁。(『中国古典詩聚花 隠逸と田園』² 尚学図書 一九八四年九月)

- 5 富永一登「春眠について」一四二～一四三頁。(広島大学中国中世文學會『中國中世文學研究』第六十三・六十四合併号)

- 二〇一四年九月)・大橋賢二「孟浩然「春曉」考——艷詩の可能性をめぐる——」二二頁。(全国漢文教育学会「新しい漢字漢文教育」第六〇号 二〇一五年五月)
- 6 松尾肇子「国語教科書における漢詩「春曉」をめぐる——(東海学園大学『東海学園大学教育研究紀要』第二巻第一号 二〇一七年九月)
- 7 吉川幸次郎「前篇」一四三頁。(『新唐詩選』岩波書店 一九五二年八月)
- 8 星川清孝「孟浩然「春曉」の訓読について」七頁。(解釈学会『解釈』第一巻第一号 一九五五年五月)
- 9 福田襄之介「孟浩然「春曉」の「多少」について」二八頁。(解釈学会『解釈』第一巻五号 一九五五年九月)
- 10 田所義行「漢詩の味その二——訓読に関連して——」二二頁。(解釈学会『解釈』第一巻第八号 一九五五年十二月)
- 11 竹谷長二郎「花落知多少」の解釈と訓読」二三頁。(解釈学会『解釈』第六巻四号 一九六〇年四月)／「花落知多少」再論」八頁。(解釈学会『解釈』第六巻九号 一九六〇年九月)／「吉川幸次郎氏の「春曉」の所説を読んで」一五頁。(解釈学会『解釈』第六巻九号 一九六二年十月)
- 12 田中佩刀「孟浩然の「春曉」に就いて」一一頁。(解釈学会『解釈』第六巻六号(六十二) 一九六〇年六月)／「春曉」再説」二七頁。(解釈学会『解釈』第六巻十一号(六十七) 一九六〇年十一月)
- 13 松枝茂夫「漢詩の翻訳について」四一頁。(筑摩書房『言語生活』一九六二年六月)
- 14 松尾善弘「唐詩読解上の誤差——訓読批判(其の二)——」三二六頁。(鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編』第三十二号 一九八一年三月)
- 15 牧克己「高等学校国語教科書の漢文訓読に見られる問題点について」一二六頁。(全国漢文教育学会『新しい漢文教育』第四号 一九八七年四月)

- 16 原田種成「知多少と一以貫之の訓みについて」一一七頁。(全国漢文教育学会『新しい漢文教育』第六号 一九八八年四月)
- 17 中村佳文「漢文教材・鑑賞を深める朗読の学習指導―リズムを重視した漢詩の“音読”指導論―」(『早稲田教育叢書7 新時代の古典教育』学文社 一九九九年三月)
- 18 鈴木修次『NHKブックス267 唐詩 その伝達の場合』(日本放送出版協会 一九七六年十月)
- 19 佐藤一英「漢詩の読みと訳について―漢詩新釈論序説―」九六頁。(『新韻律詩論』昭森社 一九四〇年六月)
- 20 松浦友久「『文語自由詩』としての訓読漢詩―定型詩(和歌・俳句)との相補性―」二三七―二三九頁。(『漢詩 美のありか』岩波書店 二〇〇二年一月)
- 21 古田島洋介「漢文訓読の〈割引率〉―記憶術としての定位―」(明星大学日本文化学部言語文化学科『明星大学研究紀要』第五号 一九九七年三月)／「漢文訓読Ⅱ記憶術」論 再検証」(明星大学日本文化学部言語文化学科『明星大学研究紀要』第六号 一九九八年十月)